

第4回：芯止まりトマトでも整枝効果が見られる

ウリ科・ナス科野菜の果菜類では整枝をおこなう。野菜によってさまざまな整枝法があり、各節から発生する側枝を除去して主茎だけを伸ばし1本仕立てにするトマトの整枝法、一番花の下の節から発生する側枝2本を残し、それ以下からの側枝を除去、残した2本の側枝を放任とし、枝が混んでくれば適宜摘葉するナスの整枝法、下位節で本葉4~5枚時に摘心して主茎と本葉の間から出てくる勢いの強い子蔓を2~4本伸ばすスイカやメロンの整枝法がある。整枝の目的は病虫害防除・肥培・収穫などの管理を効率よくおこなうとともに、収穫物の品質を向上させ、収穫期間を集中させ耕地を集約的に活用することである。その効果は1) 過繁茂による相互遮蔽の回避、2) 作業性の向上、3) 病害発生軽減、4) 品質のそろった果実を適期に多数収穫、5) 圃場を有効に利用できるなどである。整枝に付随する作業としてa) 野菜の立ち作りでは支柱に主茎を結束、または細紐に枝を絡ませる誘引作業、b) 不必要なわき芽を小さいうちに摘み取る摘芽作業、c) スイカの場合には伸ばした4本の子蔓に4果ほど着果させ形の良い2果を残す摘果作業、d) その他、摘葉、摘心作業などがある。

本年2008年のサモアの研修員がおこなっているトマトの整枝法に関連する個別実験を紹介する。研修員は農業省作物局において展示圃場を通じた技術普及、野菜栽培グループ活動としての問題分析、対応策の検討、そして活動計画作成などを主な業務としている。彼の抱える現場の問題は、輸入種子の品質が悪いこと、農業省による種子生産が不十分であること、病虫害防除法の知識が不十分であることである。そして作物管理が粗放的なので品質の向上が難しくマーケティング・市場開発に影響していることである。カボチャ、キャベツ、キュウリ、ハクサイ、トマトがサモアで栽培されている主要な野菜で、中でも市場性の高い大果のトマトをどのように生産するかが第一の問題点となっている。サモアのトマト栽培は、赤色・大果の芯止まり系品種を移植時に短い支柱で支え、その後は放任としている。この栽培では収穫果実の大きさはばらつき、総収量は上がらない。そこでどのような日本の栽培技術が適応できるか検討し、着果枝の制限とその誘引による効果をみる個別実験をおこなった。

サモアの主要品種と同様の赤色・大果の芯止まり系トマトを使い、雨除けハウス内に株間75cm、畦間100cmで植え、着果枝数を2本、3本、4本に制限し地上1.8mのワイヤーに枝を誘引した区とサモアの慣行的な放任区を設け比較をおこなった。その結果、着果枝が2から3本に増加するに従い収穫果が増え収量も増加したが、4本区は減少し、放任区を含め4処理中3本区の収量が一番高かった。整枝をおこなうことは摘芽・誘引作業が増え、また誘引資材の経費が増加する。しかし、病虫害防除、雑草管理については収穫作業の効率が向上し、適期に収穫をおこなうことや果実が地面に接して起こる腐敗果を減少させることが可能となった。研修員は品質の向上が期待できることを肌で感じる事ができたと思う。

個別実験の結果を得て、研修員は帰国後におこなうアクションプランに整枝技術を適応したトマトの高品質多収栽培の計画を取り入れようと考えている。多くの途上国では耕地の集約利用の要求や収穫物の品質、収穫期間を含めて市場価値向上への要求は未だ少なく果菜類では地這い作りが主流であるが、作業性を良くし適期収穫がしやすい整枝栽培技術は収量の向上にもつながるため、今後大いに着目されるものと考えている。



3茎整枝の良果実



放任の果実は見つけにくい



誘引の様子